

論文審査の要旨

報告番号	総研第 254 号	学位申請者	松本 智晴
審査委員	主査	武田 泰生	学位 博士 (医学・歯学・学術)
	副査	橋口 照人	副査 於保 孝彦
	副査	大脇 哲洋	副査 郡山 千早

Visualization of Amount of Nursing Care Provided and Accessibility to Nursing Care using DPC in Acute-Phase Inpatient Hospital Care

(急性期入院医療における看護量の可視化と診断群分類 (DPC) を用いた看護ケアの均てん化に関する研究)

米国をはじめとする先進諸外国においては、健康上の問題や看護診断に応じて配分された看護資源を明確化することなどを目的に Nursing Minimum Data Set (以下、NMDS) が開発された。NMDS は看護の標準化を目指す上で有効なツールと考えられているが、使用する看護用語の標準化が課題となっている。一方、看護用語の標準化が確立していない我が国においては、看護の標準化のためのツール開発が遅れていた。そこで学位申請者らは、Diagnosis Procedure Combination (以下、DPC) ごとに患者の特性と看護ケア量の関係性について明らかにすることにより、看護ケアの均てん化に資するマネジメントツールの開発を行った。DPC コード 040040 (以下、肺の悪性腫瘍) 528 名、DPC コード 060020 (以下、胃の悪性腫瘍) 170 名、DPC コード 060035 (以下、大腸の悪性腫瘍) 91 名の診療情報を対象とし、病院情報システム (Hospital Information System : HIS) に蓄積されたデータから、患者の属性や看護度、自由度、輸送区分、看護ケアの実施データ (看護行為、所要時間) を抽出した。統計解析には、統計解析ソフト SPSS Statistics 20 を使用した。まず、Spearman の順位相関係数で看護ケア量と相関を認めた変数を用いて階層的クラスタ分析を行い、患者をグループ化した。次に、統計解析ソフト R の apriori を使用し、支持度 0.1、確信度 0.8 に設定してアソシエーション分析を行い、各クラスタの特徴となるパラメーターを探索、発見したパラメーターを SPSS の決定木に適応し、パラメーターを評価した。最後に、各 DPC において患者の特性と看護ケア量の関係について分析した。

その結果、本研究で以下の知見が明らかにされた。

- 1) 看護ケア量には、全身麻酔での手術の有無、入院中の患者の日常生活動作 (Activities of daily living : ADL) の程度が主な影響要因であり、大腸の悪性腫瘍の手術患者のみに年齢が関係した。
- 2) 入院期間の中で看護度 A の日数が長い患者は、最も看護ケア量を必要とすることが示唆された。
- 3) 患者特性分類による看護ケア量の可視化は、患者の特性に応じて看護師の適正配置や看護資源の的確な配分など、看護ケアの均てん化を行うためのマネジメントツールとして電子カルテに実装可能である。

NMDS で使用する標準化された看護用語の候補に North American Nursing Diagnosis Association (NANDA) の看護診断がある。また、日本においても、看護用語の標準化活動の一つに NANDA の看護診断の導入がある。しかし、NANDA の看護診断は、日本語に馴染まない言語表現であり他の医療スタッフにわかりにくいことや、正確な診断が難しいという問題があり普及が進んでいない。したがって、NMDS を日本に導入し活用していくことは現状では困難と言わざるを得ない。本研究では、HIS に蓄積された看護ケアデータを二次利用した看護ケア量の可視化、および、看護ケアの均てん化を実現するための看護ケア量の科学的な評価手法を提案した。患者が必要とする看護ケア量を客観的に分析し、看護師の適正人員配置や看護資源の的確な分配につなげるためのマネジメントツールの開発は、急性期医療において看護の質を保証していくための重要な課題である。よって本研究は学位論文として十分な価値を有するものと判定した。